# 創立の趣旨

私たちの遠い先祖は、稲籾をたずさえてこの島に渡来したといわれる。爾来2000余年、わが国の歩みをみると、農耕社会として成熟をしながら、さまざまな発展の段階を経過しつつ歴史にその足跡を刻み続けて今日に至っているといえる。この間に、私たちの先祖は、わが国に固有の農耕文化を構築してきたが、日本の文化と社会の根幹を形成する大筋が日本民族に共有され伝承されるこの農耕の文化であったことは誰も否定し得ないであろう。

一方、戦後における顕著な工業社会への躍進は、日本の農業そのものの変質を要求した。それと並行して、農耕文化的要素の否定あるいは超克が、即近代化への要件であるという考え方が提唱されてもきた。しかし、こうした安易な近代化志向のうらに、今日の環境問題、教育問題などにみられるある種の社会的荒廃の根源の一部があると考えることも的外れとはいいきれないであろう。21世紀に向けて、私たちの先祖が築き上げてきた農耕文化をいかに伝承しあるいは止揚し、これをバイオテクノロジーの革新的展開などに象徴される新たな未知の時代へといかにつなげていくかが、今日最大の農業問題であり、また、文明論的課題であると考えられるが、この点について、まだ、確固とした思想、フィロソフィーが育っていない。今、私たちは農耕文化の原点を問い直し、新しい世紀の農業のあり方を正しく展望する重要な時期に立っているといえる。

また、私たち周辺のアジア諸国は、文化・社会の相において顕著な多様性を示すとはいえ、その根幹にそれぞれ独自の農耕文化をすえ、さまざまな問題を抱えながら新しいアイデンティティを求めつつあることで共通する国々である。私たちは、これら諸国の基層をなす農耕文化の理解なしには、これらの国々との真の相互理解に至るのは不可能であると信じるものである。

上に列挙したような学問的課題を考究してゆくためには、やがて「農耕文化研究所」を設立するなどの恒久的な方策が必要になろうが、とりあえずは、その学術的側面からの諸般の準備、具体的には組織づくり、運動の目標の設定と始動などが、当面、本会に課せられた役割と考えられる。